

聖霊降臨後第3主日礼拝

「新しい葡萄酒は新しい皮袋に」

ルカ5:27-32

ルカ5:33-39

(一)

今朝は、ルカ5章33節以下の、断食に関する質問です。

「ヨハネの弟子たちは、よく断食してお祈りもしております。また、パリサイ人の弟子たちも同じなのに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています」(5:33)。

ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちとは、朝・昼・晩と、一日3回も断食を守っていたようです。ところが、主イエスの弟子たちは、断食などご吹く風でしたから、それでいいのかとパリサイ人たちから言い寄られました。

かつて、イスラエルの民は、大贖罪日の10日間、断食を守ることが決められていました。(レビ23:27)。しかし、後になると、さらに年4回が加わり、さらに、熱心なパリサイ人は、毎週2回断食する習慣を加えたのです。

規則というのは、「シンプル・イズ・バス」ではないでしょうか。しかし、時を経る規則はどんどん増えます。例えば、十戒の安息日の定めが、後になると、何と39の安息日に守るべき細目規定が定められ

ました。

わたしたちの多くは、「断食」という習慣に馴染みがないかもしれませんが。しかし「ラマダン」というイスラム教の断食週間を持つことはご存知だと思います。韓国の牧師は、夏になると山にもり、断食する習慣があるようです。日本の禅宗の寺には、「断食道場」があります。宗教と断食とは深い関係にあるからではないでしょうか。

旧約聖書の人物の一人ヨブという人は、神から厳しい試練を受けた時、天を仰ぎ、「起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝した」とあります。「断食」ではありませんが、深い悲しみに沈むような時、自らの罪の悔い改めを迫られた時など、神の御前に自ら入りくだらせ、断食が持たれたようです。

ところで、主イエスから、パリサイ人たちは断食する時、はたから見ても、いかにも断食を守っているという陰気な、見苦しい顔つきをして断食を守っている、と注意されています。(マタイ6:16)。

それに対して、主イエスの弟子達は、定期的に断食をしなかったのですが、断食の必要を覚える時は、自主的・自発的に断食をしました。しかも、断食をする時は、「頭に油を塗り」、「顔を洗って」、「マタイ6:17」で、普段の状態と変わらないサツパリとした姿で断食を守りました。

中国が「支那」といわれた時代に、「纏足」(て

んそく(「とらいう奇妙な習慣がありました。幼児期より足に布を巻き、足が大きくならないように整形しました。小股でヨチヨチと歩いているお年青りの姿を、横浜のチャイナ・タウンで見かけたことがあります。キリスト者の生活とは、纏足された者かのように、型にはめられたライフ・スタイルをすすめることなのでしょうか。

一昔前は、確かにそうでした。クリスチャンといえば、酒はダメ、煙草もダメ、赤いルージュはダメ、パーマもダメ、映画もダメ、TVは「サタン・ボックス」といわれた時代がありました。「林文字」の小説は、自堕落になると禁書です。こうした影響は、おそらく、戦後日本に来た米国の宣教師からの影響でした。」あれも駄目・これも駄目」と言われた時代ですが、それでは、キリスト者には何が許され、何が出来ないのかがいつまでも不明でした。

こうした型にハマられた信仰のありかたは、主イエスの教えから遠くあると思われる。いえ、むしろ、主イエスが最も忌み嫌われたことでもありました。

カトリック教会には、信仰指導書として「公教要理」があります。そこには、信徒の「なすべきこと」・「なすべきでないこと」の指針が具体的に記されています。「実定法」と言われます。この善し悪しを、いちいち自分で判断しないで済むのですから楽といえは楽です。しかし、それは、親の言う通

りに生きている主体性のない子供のようでもあります。

わたしが最初に学んだ神戸の神学校は、米国長老派の神学校でした。学内には、規則というものがまるでありません。ただ、学期初めに、校長から、「BE GENTLE MANー、紳士たれ」ー、その自覚を持って学んでくださいと念を押されました。主イエスは、旧約聖書の数ある多くの教えを、何と一つにまとめられたではありませんか。

ある時、ひとりの律法学者が、「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」と質問してきた時、主イエスはおっしゃいました。『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者たちが、かかっている。何と、すべての教え・戒めを一つの戒めに凝縮なさいました。神を愛し、隣人を愛することが、なすか、なさないかの絶対的基準であると言われたのです。

(2)

主イエスは、弟子たちが断食する時、しない時とがあると言われました。

「今は、花婿が一緒にいる時です、その花婿につき添う友だちに、断食をさせるは

たがてきめでしょうか。しかし、やがてその時が来て、花婿が取り去られたら、その日には、彼らは断食をします」(5:34-35)。わたしの弟子たちが、今は断食をしないのは、花婿なるわたしがいるので断食をしないとおっしゃいました。

結婚は人生の一大イベントです。二千年前のユダヤ社会では、結婚披露は盛大におこなわれました。貧しい時代にもかかわらず、村を挙げて祝い、接待は一週間も続いたと言われています。村中の多くの者たちが、祝いにかけて来ている、そのおめでたい婚礼の席で、誰が断食をするでしょうか、断じてありません。

むしろ、一緒になって飲んだり食べたのして祝いを共にします。そうした時、断食をすることなど婚礼の席で最もふさわしくありません。主イエスは、時と場合によって断食の必要をお認めになっています。しかし、今は、花婿なるわたしがいる時です、断食をすることは相応しくありませんと申されました。

### (3)

主イエスは、ここで二つの具体的なたとえを、パリサイ人たちに話されました。

「だれも、新しい着物から布切れを引き裂いて、古い着物に継ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、その新しい着物を裂くことになるし、また新しいのを引き裂いた継ぎ切れも、古い物には合わないのです」

### (5:36)。

古い着物に、新しい着物から切り取った布をあてれば、古い着物が引き裂かれてしまいます。パッチ・ワークしたような継ぎ接ぎだけの着物ではなく、新しい着物を着るべきであると言われています。

エペソ書4章23-24節には、「心の深みまで新しくされて、真の義と聖とをそなえた、神にかたどって造られた新しき人を着なさい」との勧めがあります。

「キリスト者」とは、キリストという新しい着物を身に着けた人なのです。新しい着物を身に着けた者は、それまでの古い着物にどれほど愛着があっても、古い着物を脱ぎ棄てなくてはなりません。

「あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅びて行く古い人を脱ぎ捨てたではありませんか」、「心の深みまで新たにせられた」ではありませんか、「であるとするれば」、「真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しい人を着なければなりません」(エペソ4:22-24)と勧められています。

「古い着物を脱ぐ」、できれば、上衣だけでなく、肌着まで脱ぐ、脱いで裸にまでなる、そこまで脱げないのは、古い着物に愛着があるからではないのか……。

「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によつたのではなく、きずも、しみもない子羊のようなキリストの尊い血によつたので

あります(①ペテロー：18)。

・さらに、主イエスは、もう一つのたとえを言われました。

「だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒は流れ出て、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければなりません。また、だれでも古いぶどう酒を飲んでから、新しい物を望みはしません。」

新しい葡萄酒を古い皮袋に入れば、すべてが駄目になる、新しい皮袋に入れなさいとおっしゃいました。

「古い皮袋」とは、「旧約聖書」という古いウ酒、その中身は「古いブドウ酒」といわれ、新しい「律法」(トーラー)です。

「新しい革袋」とは「新約聖書」という新しい革袋、その中身は「新しいブドウ酒」といわれているイエス・キリストの「福音」のことがあります。

収穫したばかりの新しいぶどう酒は、発酵する力が強いので、弾力のある新しい革袋に入れなくてはなりません。もし新しいぶどう酒を、古くて弾力のない革袋に入れたとすれば、古い革袋は破れて、ぶどう酒は台無しになってしまいます。

ですから、「新しいブドウ酒」は、「新しい革袋」に入れなければなりません。

「新しい葡萄酒」というキリストがもたら

してくださった福音を信じた者は、収穫したばかりの発酵力の強いブドウ酒をいただいて、香ばしい匂いを辺りにただよわせている者のようであります。そこから醗酵してくる喜びは、それまでの生活習慣を打ち破るほどの勢いをもっています。

御子イエス・キリストのもたらしてくださった「福音」の教えは、当時のサドカイ派やパリサイ人たちの固定概念を打ち破るものでした。その内なる自由な生き方に対して、周囲は恐れて、主イエスは彼らから拒絶され、殺されました。

キリストの福音を信じた者は、内からフツフツと湧き上がる喜びを内に秘めています。古い皮袋―、古い習わしに慣れないう「喜び」と「自発性」を伴っているのです。

わたしの、これまでのすべての罪を赦し、穢れをきよめ、しかも、わたしを愛して止まない、慈しみ深いイエスを愛します。この罪深いわたしと、共にあろうとしてくださった計り知れない喜びを噛みしめたいものです。

「ああ驚くべきイエスの愛よ、罪を飲みやる大みめぐみよ、いかなる者も立ち返らば、救いたもう主の恵みよ、恵みの深き広きはかりうるものなし、わたつみより大空より、さらに深く広し、けがれにけがれしわが身も、恵みにて救わる、尊き名を讃えよ讃えよ」

「罪の鎖を打ち砕きて、自由なる身となし

